提言

岩手の子どもたちに付けたい力

岩手県教育委員会事務局
学校教育課　学力向上課長　菊池　一章

こうえんで　たろうくんが　3人の友だちと　あそんでいます。
　あとから　はな子さんが4人の　友だちと　あそびにきました。
　こうえんには　ぜんぶでなん人　いますか。

さて、この問題、何年生だったら「軽々と」解決できそうでしょう。学級の子どもたち、自分のお子さん、お孫さんを思い浮かべながらお考えください。

これは、小学校1年生算数の、ある教科書に載っていた問題をアレンジしたものです。国語的な要素も入っていますので先生方からは「意地悪だ」と叱られそうです。確かに、6年生でも……。

以降、この問題を解決する授業場面を想定し、**「子どもたちに付けたい力」**について**「3つの視点」**で考えてみたいと思います。

「なんだ、先生向けの話か」と思われた保護者の皆さん。学校教育で子どもたちに付けようとしている力は、学校という閉じた場でしか通用しない力ではありません。それどころか、学校を出てからも、これからの時代を生き抜いていくために必要な力を育てています。もしかすると既に、日常生活の中で、これからお話しするような力を発揮しているかもしれません。

視点1　学習の見通し

「『わかっていること』に気を付けましょう」、「『ぜんぶで』はたし算だね」といった指導が身に付いている子どもは、おそらく「3＋4」と、式を立ててしまうのではないでしょうか。中には、計算まで終わらせ、満足げに微笑んでいる子もいるかもしれません。

間違うことは、決して悪いことではありません。悪いどころか、この子には、**これまでに身に付けたことを思い出しながら、それを生かして結果を予想する（この場合は式を立てる）という力**が育っています。

ただ、ここでさらに期待したいのは、「できた！」と、それで終わりにするのではなく、**「本当にこれでいいのかな」、「もっといい考えはないかな」、「どうすれば確かめられるかな」、「どうやって説明しようかな」といった、その先の「見通し」を持とうとする態度**です。

視点2　課題解決のための学習活動

「3＋4」と考えた子どもが次のような説明をしました。

「わかっている数は3と4で、『全部で』はたし算なので、式は『3＋4』だと思います」

問題場面のとらえに**間違いはあるものの、一応、筋道立てて説明する**ことはできています。低学年なら、このような説明ができれば立派なものです。

さて、教室は、「同じで～す」の大合唱です。と、その時、小さな声で、**「ちょっと違う考えなんだけど…」**と、つぶやく子どもが現れました。

「太郎君が友だちと遊んでいるところを●を使って**図でかいてみた**んだけど、●が4つだよ。花子さんのほうは●が5つ。『4＋5』じゃないかな…」

この子は、**友だちの考えと自分の考えを比べながら聞く**ことができています。**勇気をもって、みんなに説明しようとしている**ことです。さらに褒めたいのは、問題場面の**文章を別の表現（ここでは図）に置き換えて考えようとしている**ところです。

その後、「3＋4」VS「4＋5」の話し合いが続く中、ある子どもが、「あ、そっか」とつぶやきました。**友だちの考えを聞いて自分の考えの間違いに気づき、修正する**ことができたのです。その勇気、態度に拍手。

視点3　学習の振り返り

「のど元過ぎれば熱さ忘れる」。人は、結論が出てしまうと、まるで、「最初からできた、しかも、一人でできた」かのような錯覚に陥ることがあります。子どもならなおさらです。

「熱さ（苦労したことなど）」を忘れず、身に付けた力を次の学習に繋げるためには、子どもたちに、**解決の達成感を感じさせたり、次への意欲を持たせたりする**ことが大切です。そのためには、今日の学習で自分はどのように考えてきたのか、自分の考えをよりよいものにしてくれたのは、誰のどんな考えだったのかといった解決の**過程を振り返ったり**、「前よりも粘り強く取り組めるようになったなぁ」など、自分の**学ぶ態度の変容を振り返ったり**することが重要です。

◆「いわての授業づくり3つの視点」

岩手県教育委員会では、子どもたちに力を付ける授業づくりを目指して、**「いわての授業づくり3つの視点」**という、授業づくりの基本的なポイントをまとめた資料を作成し、全ての学校、全ての先生方に取り組んでいただいています。県のホームページに掲載しておりますので、是非ご覧ください。

※左記QRコード

◆　終わりに

これからの時代、子どもたちに確かな力を育成するためには、ますます、「家庭・地域・学校の連携・協働」による教育が必要になってきます。

突然ですが、手の届かない隙間に物を落としたご経験はありませんか？そんなピンチを見たお子さんが、以前に使ったことがある棒（明らかに短い…）を持ってニコニコしながら戻って来ました。このあとが分かれ道です。

A「そんな短い棒じゃ無理」

B「どうするの？　お願い」

ご家庭にも、子どもの力をさらに伸ばすチャンスはたくさんあります。「連携・協働」。これからも力を合わせて子どもたちを育てていきましょう。

ところで、この問題ですが、「このお話だけでは分からない」が答えです。実はその日、二郎君たちも大勢で公園に遊びに来ていたのです…。

プロフィール

菊池　一章
（きくち　かずあき）

平成2年度、紫波町立古館小学校から教員生活がスタート。平成21年度、学校現場に別れを告げ、教育行政職に「転職」。北上教育事務所指導主事から始まり、令和元年度から現職。54歳